川柳雜誌

六月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
大正十四年六月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌 第二卷 第六號

川柳雜誌　第二卷　第六號（大正十四年六月一日發行）

目次

本事川柳……武笠山椒（七）
近作……麻生路郎（一）
眞劍に生きる……安川久流美（七）
文壇と柳壇……塚崎松郎（三）
六厘坊忌……一柳子記（一）……花童子歡迎小集……一柳子記（五）
第十支部小集……馬行記（一五）……靑灯居對座吟……松郎記（一六）
近作柳樽……麻生路郎選（二）
爪……齋藤松窓選（三）
盥……竹田蘆穗選（三）
朝風呂……林田馬行・太田一聲共選（二五）
募集句
古句研究上の滑稽……西原柳雨（二七）
柳壇無駄話……遲日莊主人（三）
川柳塔……（二八）
刀三、松雨、雅幽、馬行、莢豆、かはる、松郎、葭乃女、二柳子
川柳家の戸籍調べ……（二八）……編輯後記……（二八）
漫畫　旅の空……吉岡鳥平（二八）

近作

麻生路郎

さあみんな降りてくれこお父さん
やうもまあ豆腐ばかりこあきれられ
人間のあはてたべたさもしい氣
思へども旅費がないから日本に居
こんな筈でなかつたこいふ日本に居
大杉を殺ろし思想を取り逃がし

近作柳樽

路郎選

門を掃くこの頃戀を知りそめて　豐中馬行
ほつねんと父貧さしの中に坐し　同
逢ひたさを三疊の間に締め切つて　同
無責任すぎる父親ばかり寄り　同
詫びるのも嬉しきものゝうちとなり　同
冷たい手ですねと矢張り握りしめ　同
ラケットに足が短かい夫人なり　同
灯のうつる道をコツポりはかごらず　同
電柱へ子供二人が耳を當て　同
踏切りで一歩退く風をうけ　同
丸刈にしたをつくゞく母眺め　同
この頃は腹にせかれてゐる自炊　同
見詰めてる疊だん〳〵小さくなり　同

浮世繪の突き出たあごをなつかしみ　同
夜遊びを眼でたしなめる計嫁　同
その何んぢやなごと調べに來る巡査　同
暗礁の近きにあるを二人知り　同
妹の顔を何んともなしに見る　同
唇の外は何者だもあらず　同
いつ出たかもう船の無い朝となり　山口吐露樓
退職金考ゐ乍ら未だ勤め　同
もう性に眼覺めたと云ふ髮になり　同
停車しなければ便所へ立たぬ母　同
待たしとく事に社長は慣れたもの　同
御神籤が悪かつたのにしてしまひ　同
考ゐて置かうと味氣無い返事　同

それ御覽だからと母に叱られる　同
本懷に孝子の刄光る也　同
待ちかまへてゐた竿が出る雨上り　同
臺所へ立つ轉寢は物言はず　同
しかゞくと扇子で書くは謀り事　同
萬一の爲の請取書がたまり　同
鳥居から見る石段も人が混み　同
四月一日が待たれる靴鞄　同
是う云つておけと誰だか來そうな日　同
しんとした教室みんな叱られる　同
お目見得に來て眼に餘る子澤山　大阪乾坤
いつとなく病む子へ玩具殖ゑて來る　同
安心の出來ぬ倅へ歳を取り　同
おいそれと出された金へ手が伸びず　同
いつまでも母の炊事を淋しがり　同
責任のない相槌は笑ふだけ　同
捨てる氣の男へ今日も逆らはず　同
聞いて見て呉れと涙の顔を向け　同
打ち明けも出來ない夢を娘見る　同
鏡屋の奥から夜の灯が點り　同
相談をすれば亭主の柄になり　同

こゝろよく頭へ動く無駄鋏　同
溫かい言葉をかけてくれません　神戸琴月
鳥籠を見上げるほどい熱がこれ　同
氣に入りの社員に娘やるときめ　同
皆酒のせいですと疲さからわず　同
過言ではなかつた筈が詫びに來る　同
言ひ負けた妻縫ひさしにこりかゝり　同
義弟の手を借りてかゝもめが出來　同
愚痴を言ひながらも女房肩をもみ　同
氣に入つた度胸そのまゝつれ歸り　同
枕元無理言ふて呉れ言ふて呉れ　同
烏が巣をしさうにひげが白く伸び　同
支那傘の重みを見せて後につき　大阪しげる
あまりのまじめさに終まで聞けり　同
久方に眼鏡を拭いた心もち　同
考へてゐるとおかしな子にせられ　同
機關車の重さを思ふ日もありぬ　同
氣を變へて仲間入りする事になり　同
お天氣を引受けさせて戻つて來　同
お前もさう思ふかこうなづいて　同
荷造りがしつかり出來て放つて見せ　同

まだついて來るなと思ふ東西屋　同　秀哉
別莊の塀を廻つてちと疲れ　同　同
しつぺいがちと强過ぎた騷がしさ　同　同
店へ出て養子の仕事振りを見る　同　同
爪楊子持つて議論にきゝほれる　同　同
里からの手紙を見せる差向ひ　同　同
後任は前の不平を少しきゝ　同　同
おちぶれて別れた同士道で合ひ　同　元山
叱られた得意でお辭儀するばかり　同　同
又來ますなどゝ女は如才なし　同　同
復讐をさせる積りのお腹の子　同　同
生れ付きですはと女氣にもせず　同　同
落付がかんじんじやぞと父意見　同　同
獨身で押し通す氣を見込まれる　同　同
雨ふりの日は算術がよくちがひ　神戸　美代子
まつち箱ならべたやうな家つゞき　同　同
あの子でしよ草履かくしで泣いたのは　同　同
うぐひすの啼ごゑあなたしてごらん　同　同
嬶さんもお買ひと金魚賣はいひ　同　同
けむたいねあなたも涙出てゐてよ　同　同
すぐに泣くくせにあんなに口ごたへ　同　同
ちと椅子を動かしごうか掛け給へ　同　山美
鴨綠江皆んなの聲になつちまひ　同　同
陽炎の線路の中を工夫堀り　同　同
お互ひに名刺を出して久し振り　同　同
風邪引いた子の洋服を脱がす也　同　同
皆んな寢て夜業へ電氣下ろすなり　同　同
ハモニカを吹くあの子等の別世界　大阪　東城子
夕刊は奥へ素通りして仕舞　同　同
卸値といふを校長嬶しがり　同　同
枕だけ女房後から持つて來る　同　同
臨檢の巡査いそ〳〵出掛けたり　同　同
鍼力屋ももう晝飯にしたらしい　同　同
此の雨が銀糸に見ゆる姉の戀　同　眠聲
姉一人黑塗の下駄はいてゐる　同　同
あの塲合すげなくしたも女氣か　同　同
又藏の横で彼女は待つてあり　同　同
何不自由知らぬ宵寐の床は出來　同　同
嘘ですよすぐ兄さんはあんな事　同　同
病人に秘めては居るが不事が出來　螢ヶ池　滿三留
速記者に息をつかせぬ雄辨家　同　同
白靴をちとまごつかす撒水車　同　同

撒水車手持無沙汰の雨となり　同　留守番へちと彼の人を任かされず
洋箱屋面白さうに釘を打ち　同　仕遂げたら死んでもよいといふ仕事
撒水車しばし埃りを征服し　同　御大が掬ふたらしい相場欄
商用を忘れ將棋へ輕く曳き　堺佳鳴　自己を知る明いつまでも車掌なり
俺なぞはもつと苦勞をしたと云ひ　同　救世軍洋服のしみ苦にもせず
眠つてる姿で物を考へる　同　喜多流か觀世流かと足を停め
一生の願ひ女に多いこと　同　自轉車の路は二寸で足りる筈
苦勞した話を母に聞かされる　同　病人がそろ〳〵世話をやきはじめ
その後で親父へ尻を持つてゆき　室蘭愚劣　散髪屋言ひ憎いこと書いてあり
延び切つてそこでその日の影が消へ　同　皿持つて出たに魚屋負けぬ也
しりぞいてそこで妻子の顔が浮き　同　休憩所横にアイスクリン屋居り
せわしなく女給が映る摺り硝子　同　お渡りを營業部長知らぬ振り
そんなことを言つてこの人逃げる氣か　同　福引は早一等がかゝげられ
借金でやはり私を賣りました　螢ケ池露斗　値段だけ聞いてゴム靴通り過ぎ
お前丈醉ふては行かぬ此話し　同　復緣の妻の立居の若く見ゆ
云ひ易い賴み私事でなし　同　煙突が殖ゑて草取り間に合はず
一人子が死んで淋しく暮らします　同　置炬燵押し合つて見る雪景色
まあように調べておけと金主去に　同　寄せ切れへ女の顔のあざやかさ
トランクへ母は門まで出て送り　大阪竹柔　餘念なくあぐらをかいて下駄歯入
向ふから我が下宿屋の娘が戻り　同　要するにあいつ商賣人なのさ
此の平屋からもピアノの音がきこえ　同　郊外の灯ともし頃がいゝ二階

體面を保たんがため使ひ込み羨やまれ乍ら新調値踏みされ樂屋風呂素顏の皺を笑ひ合ひ吉報を待つ社長室灯がこもり公設で女中自分の分も買ひ花ちやんこもう遊ばれん年になり宵寢するわけを女房聞き質し蠅一つウエートレスを困らせる貧乏をさせるに惜しい美人なり仕込の妓隅へは置けぬ口をきゝ惡戯な犬鷄をばたつかせ鐵工所こころ嫌はず草が生え婆婆つけがあつて親分死に切れず妾宅はいつも時計が止まつて居石垣のあすこの穴へ逃げました叱られる耳に隣の蓄音機エレベーター母親だけが乘遲れ南天が一本きりの狹い庭正直はねつから金になりませぬ早仕舞風呂の湧くのを待つばかりやれ〳〵こ腰を掛けろも父であり

福島　新坊
同　同
同　同
同　同
大阪　柳人
同　同
同　同
螢ケ池　狂華子
同　同
同　同
神戸　嶺月
同　同
同　同
豐中　案山子
同　同
螢ケ池　屏三呂
同　同
池田　默太
同　同
千葉　駒人
同　同

さうだらう矢つ張り君の置忘れごうだつた刺身挾んだまゝで聞き干物をくゞり屑屋は奥まで來遊びなはれこ云ふのへ一寸笑ふこき捨子こは言はず育てた共稼ぎ友達こはからず逢ふたビルヂング雨風を傘の力で押して行き雨模樣汽笛の音も近過ぎる辻占に迄も女難がつきまこひ下駄直す手つきを褒めて叱られる内職を出されるまでも話し込み表彰は尙奮勵を望まれる拜借こ云はれ燐寸を振つて見る蠅取器これが地獄こは見ねぬなり嘘言ふて歸り後から呼ばれさうドラッグの又麥飯で一頁向ひまで行くに女は走つてるほんこうに罪な人だつせこ仲居座蒲團を二つに折つてまだ去なず一二軒貸家もあつて勤めに出醉つたのが犬こキッスをして見せる

小樽　千龍
同　同
大阪　鳶歩
同　同
同　薫流
同　同
同　山尺
同　同
同　放馬
同　同
神戸　南天棒
同　正坊
垂水　晃雅
螢ケ池　曳峰仙
大阪　蚊十
同　一路
同　炭車
同　わたる
同　聞路
能勢口　曽天
横濱　幸次郎

本事川柳（二）

武笠山椒

（九）跡を見ず行くに猪衛右門きつい事

小菅猪右衛門は幕府の御使番で、蝦夷地騒動の當時、防備隊の監督役が四人任命された其の筆頭である。『跡を見ず行く』とは猪右衛門に猪武者を利かせたのであらう。

○

（一〇）命は義によつて哀れな父太夫

通航一覽二八七（五）の所で引用した文の續きに『かれ（露人をいふ）五月朔日より二日に及び、米酒等を奪ひ本船に積いれ所々放火して同三日出帆す。此とき箱館奉行支配調役下役元締戸田又太夫かの地山中において自害す』とある。他の役人共は皆逃げたのに、此人だけ自殺したのは、頭目だけに責任を感じたのであらう『命は義に依つて輕し』は支那傳來の諺。

○

（一一）穏便にしろが奉行の口つくせ

此の時の箱館奉行は羽太安藝守といふ人で、措置宜しき得ずと認められたものと見て、後に譴責を蒙つて居る。

○

（一二）こつそりとおろしやと旦那ふさひでる

當時當局が成丈け事を内密にをさめやうとして居るのを、旦那が下女に手をつけたといふ樣な事に引つかけてひやかしたのである。おろしや＝魯西亞　隋胎。

○

（一三）奥の手は伊勢から風の神が來る

通航一覽二九二に引いた『山本氏筆記』の文が此の句の註釋

になる。『往古より異狄我邊境を侵すもの數十度、夫が中にも弘安四年の寇患ほど甚しきはなし。…幸にして伊勢岩清水の神威に依つて、元寇十萬一時に海底に沈み、辛うじて患を除くに至る。つら〳〵今を見るに、事は其時に似て、士民の强弱知るべからず。神威も亦必ず頼みがたし云々』。

これ迄が蝦夷地騒動の分。これから松平外記刃傷一件の分に移る。凡そ四十七句。

○

松平外記刃傷一件といふのは、西丸御書院番といふ役を勤めてゐた松平外記といふ旗本＝三百俵取＝が、文政六年四月二十二日、殿中の詰所で、傍輩三人を斬殺し、二人に手を負はせ、自分は其の場で自殺した事件をいふのである。表向は乱心といふ事で鳥かついたが、實際は古參の傍輩どもが、寄つてたかつて新參者の外記をいぢめたのが元である事は下の句ともでもわかる。

○

(一四)太平に武を忘れぬで大騒ぎ

註に及ばず。

○

(一五)御城を枕犬死あぢきなし

殿中で死んだのを城を枕とこぢ付けたもの。犬死は無論殺された方をいふのであらう。

○

(一六)御沙汰には殿中別條ありと書き

御沙汰は御沙汰書、即ち命令書。御書院番が交代する時には『殿中別條之なく』といふ樣な言送りでもあつたのではあるまいか。

○

(一七)ごつさくさ抜く切る逃げる追缺ける

註に及ばず。

○

(一八)一六に一ッたりなひ勝負なり

刃傷の相手は本多伊織、間部源十郎、神尾五郎三郎、沼間左京、戸田彦之進の五人であつたから、一六勝負の六には一つ足りないと言つたのである。

○

(一九)江戸ッ子は皆外記ぶしをほめる也

外記の方に世間の同情が集まつてゐた事が此の句でわかる。

○

(二〇)駕籠の内伊織は首を抱いてゐる

本多伊織、沼間左京、戸田彦之進の三人は其の座で即死したのを、表向は手負と屆けて取捌いた。だから、駕籠で自宅へ運

ぶのも生きてゐる積り。實は屍骸が首を抱いて乘つてゐるのである。

○

(二一)沼ひきやう損の屋敷を尋ねて來

ひきやうは左京のもぢり。損は殿のもぢりでもあるか。

○

(二二)子も孫や彦之進まで恥辱なり

彦を曾孫にかけたまでの句。

沼間や戸田がこんなに評判の惡いのは、外記拔劍の當時に、いづれも腰を拔かしてしまつて外記を取押へる才覺も出ず、まごゝしして斬られてしまつたからである。

○

(二三)劍術を間部ば負けはせまいもの

『間部』を『學べ』にかけて源十郎をひやかした句。

○

(二四)疵吟味神尾は酒を買うたやう

神尾五郎三郎の調書に『尻こぶを横に三寸程の疵、深さ五六分程一ケ所』とある。此の句が酒買つて尻を切られる』といふ諺を使つたものである事は言ふまでも無い。

○

(二五)覺えたかうぬを數よく五ツ言ひ

相手が五人であるから。

○

(二六)舟ならば一艘ですむ人數なり

當時の猪牙舟は一艘五人が定員であつたのでもあらうか。

○

(二七)果報ものひとり安西伊賀之助

伊賀之助も外記と同じ組の御書院番で、しかも大に嘲弄した一人である。しかし幸に怪我もせず『外記儀剛ぜまなる氣質と存候へば其心得も之有るべき處、嘲弄ケ間敷儀申聞け候段不埒の事に候。之に依つて御番御免、小普請人仰付けらるゝ者也』といふ御捌きで濟んだ。

○

(二八)きらずに死では此むねと外記はしやれ

夕霧伊左衛門の『逢はずにいんでは此の胸が』のもぢりである事は言ふ迄も無い。

○

(二九)悔めが短慮頼母のロッ癖

松平頼母は外記の父、此の一件で『西丸御小納戸役御免、若年寄支配寄合に相成、差控に及ばず』といふ處分を受けた。

○

(三〇)内心は頼母しい子と思つてる

前句の裏。

○

（三一）書置があらば見せろに聞飽きる

外記死後の取調。

○

（三二）疵は深い氣は慥にといふはむり

死んでゐる者を手負の樣に詐つた申立。本多伊織の調書に『襟下より咽邊へ掛け深さ五寸程疵一ケ所、其節之樣子相尋候處答之なく候』

○

（三三）外科離儀死んで居るのを縫せられ

解に及ばず。

○

（三四）だまいつて逃ぬは命しらずなり

（三五）席順に逃ろ〳〵と伊織いひ

（三六）雪隱へ逃るゝ中で咳拂ひ

（三七）横なぐりにて切られたが横死なり

これら皆解に及ばず。

○

（三八）されば候と詰合は椽の下タ

外記が刀を抜くと、居合はせた同役どもは皆逃出したのだから、緣の下へ逃込んだのも無論あつたであらう。それが跡で調べられると『されば候』とばかりで二の句が繼けない。

○

（三九）腹切つて而後みんな來る

同役等の上申書に『部屋内物音致し候間、何事と存じ、御番所に罷在候に付、部屋入口御襖明け候處、脇差振廻し御番所に走出で候樣子に見請け候間、御襖締候内、既に御襖強く押し候間、御番所へ出し申さず、取押へ申す可しと存じ奉候得共、明けては御番所へ走出候樣子に付、池田吉十郎外より部屋へ相廻り見受候處、外記儀は最早自殺の體に相見得、物靜に候間、二階へ上り見候處、本多伊織、間部源十郎、神尾五郎三郎、沼間左京、戸田彦之進、右五人手疵負罷在候云々』。

○

（四〇）大死の見分鹿はきつい事

當時の目分役は御目付新庄鹿之助、同阿部四郎五郎、犬と鹿の取合せ。（未完）

六厘坊忌

五月十七日夜
於端の坊

柳壇の天才小島六厘坊氏が明治四十二年五月十六日に逝去されてから最早十七年の歳月が流れました。我等後進は同氏の偉業を偲ぶために、十七日午後六時から端の坊に於て六厘坊忌を修しました。例によつて多數の參會者がありました。

本社主幹麻生路郎氏から、兼題披講に先立つて故人の人格こいかに句作に忠實であつたかこいふ實話・ならびに川柳以外にも多くの作品が遺されたことについてお話がありました。

當夜の參會者左記四十八名の外に、日車（滋賀縣）新坊（福島縣）莢豆（香川縣）葭乃女（鳴尾）凡平、百石（大阪）の諸氏から兼題をよせられました。御好意を感謝いたします。（二柳子記）

路郎、五葉、溪花坊、紋太、文久、一丸、しげる、一路、放馬、乾坤、飯山、秀哉、わたる、柳人、元山、俵藏、逸鬼、蛟十、柳水、世間亭、青波、眠聲、聞路、山月、佳鳴、一柳、のぼる、青影子、炭車、薫流、廣賀、助六、長人、波郎、秋葉、飛水、萬よし、一雄、幾之助、悠々、刀三、松郎、かほる、馬行、古城山、双柳、松雨の諸氏と二柳子

薄　着（兼題）　路郎選

薄着して眼科の順を待つてゐる　松郎
灯が薄着の肩へ洩れるなり　かほる
物足らぬ氣持がするも薄着なり　元山
なで肩が此身に欲しい薄着也　葭乃
嘘嘘薄着止めよこ續いたり　波郎
喰物が違ひまんがこ薄着　洒落
薄着ふこ親に濟まないなこ思ひ　莢豆
お前だけだこ薄着叱られる　蛟十
診察に薄着しました事も言ひ　青影子
寒なつた薄着へほたる見附から　助六
降り出して薄着こ行た子を案じ　炭車
孤兒院の薄着に要らぬ筆を買ひ　新坊
薄情な女にされてゐる薄着　凡平
薄着したのはお座敷の隅にゐる　二柳子
海岸を薄着の二人引返し　百石
叱られて薄着は寒い煮地を見せ　秀哉
洟筆に薄着をすなこ母は書き　萬よし
薄着して薄化粧して連こ出る　溪花坊
なれてまつさかいこ薄着すまて　一柳
薄着から目に立つ乳房こはなり　馬行
今日からの薄着に家を廣う見る　同
薄着した晩洋杖を買ふて來る　紋太
大阪の風が薄着の裾を吹き　同
（人）母こ子の薄着の膳には豆　松郎
（地）夜の更けこを薄着の方が知り　飯山
（天）薄着して心正しき膳につき　日車
（軸）薄着で肩をならべるはたち　路郎
辭職するつもり薄着で出かける　同

經　節　五葉選

經節磨いたこをなでゝ見る　しげる

鰹節あしたの分もかいて置き　秀哉
鰹節水雷艇の姿なり　文久
鰹節かきよく成つてぽきと折れ　かほる
到來の鰹の譯を一人知り　萬よし
鰹節亭主がかくとゑらい音　馬行
鰹節箱のまんまで忘れられ　青波
手のひらに隱れてしまう鰹節　松郎
新世帶まだそのまゝの鰹節　乾坤
其時になつてかいてる鰹節　一柳
土佐節はカチ〳〵させてほめる　同
鰹かく音を聞いてる二階借　聞路
鰹節ならべる軒朝になり　同
鰹節嫁は鉢へ腹を立て　放馬
鰹節娘は腕がだるうなり　同
(佳)鰹節切れて節期も近うなり　助六
(佳)鰹節のかけを持たして泣　松郎
(佳)鰹節豆腐の上で生きかへり　一角
(佳)鰹節妻の氣性のまゝ削れ　古城山
(佳)鰹節青い松葉もいさぎよし　世間亭
(佳)鰹節嫁の袖口動せる　溪花坊
(佳)鰹節みじめな形に痩せて　青影子
(人)返事しておいてかいてる鰹節　路郎
(地)鰹節大きな箱が殘るなり　紋太
(天)鰹節猫がころがす暮しなり　一雄
(軸)鰹節遲なりますと代らせず　五葉

紺絣　溪花坊選

紺絣親に分らぬ事ばかり　青影子
紺絣だけでほつとく男の子　山月
紺絣ちと生意氣に成りかゝり　世間亭
紺絣ドア！に力餘つて居　しげる
父親をあやまらしたる紺絣長人
紺絣今わんぱくの盛りです　眠聲
紺絣美人の姉をもつてゐる　放馬
世渡りの苦勞を知らぬ紺絣　乾坤
これ程に延びた去年の紺絣　萬よし
告知板失敬すると紺絣　波郎
待たされた事を氣にする紺絣　路郎
紺絣洗ふ盥の水の色　廣賀
紺絣二階の落ちる音をさせ　古城山
ボート屋で煙草呑んでる紺絣　松郎
紺絣大きな足をしてるなり　一雄
紺絣ひにやるともう歸り　一柳
紺絣卷帶をして叱られる　かほる
紺絣ゴム靴履いて遊びに出　わたる
紺絣何の野心も持つて居ず　同
朝日座と常盤座へ行く紺絣　刀三
嫁にゆく姉を困らす紺絣　同
(人)紺絣親族共をおこらせる　柳水
(地)蛙釣りして紺絣汚して來　助六
(天)設計をくさして通る紺絣　五葉
(軸)紺絣一人が子規の句を褒る　溪花坊

手切金　紋太選

手切金ほんとに怖い人でした　眠聲
髮の毛と未練と殘る手切金　長人
手切金指を曲げたり伸したり　文久
手切金貰ふ時分は裏に住み　溪花坊
せうこともなく手切金金出すと極め　青波
手切金ビールをのんできめてる　路郎
手切金借りた金とは云はぬなり　放馬
手切金達者でゐろと附け加へ　馬行
家名には換へられません手切金　乾坤
手切金ちと薄情と思へども　同
手切金無理をして來て投げつける　古城山

手切金息子に少し荷が重く　同
一二三枚で手切金渡される　刀三
手切金の事でお茶屋の畫へ來る　同
手切金だけでも人を羨ませ　世間亭
別れるこなるこやつぱり手切金　同
手切金目當ての氣隨氣儘まり　同
（軸）手切金事穩かに濟みは濟み　紋太

轉地　古城山選

避暑便り君驚かす秋を待つ　萬よし
轉地して雨の降る日の文を書き　紋太
轉地には持つて來いだと車窓から　山月
轉地した當座癒つた氣にもなり　波郎
陶器繪に出ひ出もある轉地なり　文久
鯛の値をハガキに書で來る轉地　溪花坊
配達を轉地してから嬉しがり　飯山
看護婦もおんなじ月を見る轉地　青波
轉地してまだ寄跡を知らず住み　かほる
轉地から戻ると隣り替つてる　炭車
二三日だけに轉地も無事過ごし　青彩子
轉地してからは元氣になりまし　のぼる
轉地する身には淋しい海の音　乾坤
轉地からレターペーパを頼まれ　刀三
轉地先壁をはさんで話し合ひ　秋葉
轉地から娘は腸やけして戻り　放馬
暮れて行く果てを轉地は眺めて居　悠々
轉地してあれから何の沙汰もなし　聞路
轉地から螢取れると云ふて來る　助六
いゝ空氣吸ふておいでと停車場　わたる
諦めてゐると轉地の便りが來　長人
もうテニスするほど轉地よいとこ　路郎
轉地したあとを淋しう母と娘で　秀哉
轉地した息子は忘れられたやう　同
轉地する其方角は嫁の里　五葉
轉地して暫く松を相手なり　同
轉地から朝の氣分を書送り　馬行
家の採め轉地このかた忘れて居　同
轉地から悲觀〳〵と書いて來る　同
（佳）宜い方とだけ書で來た轉地先　萬よし
（佳）轉地も事で叔母が來叔父が來る　柳水
（佳）こんな花あるのかと轉地で思ひ　松郎
（佳）轉地で氣樂のいらぬ戀になり　飛水
（軸）轉地から戻って息子氣が變り　古城山

門弟　互選

門弟の一人は裏へ廻るなり　薫流
ゐらさうにして門弟は恥をかき　魚交
門弟は又ブルドッグ連れて來る　眠聲
門弟のうちの一人が兒を育て　萬よし
先生のレコに門弟叱られる　波郎
佛壇の前で門弟ちと馴れず　山月
あれ以來門弟一寸減つてゐる　蚊十
門弟はそこだと云ふたことを打ち　しげる
門弟のかひなに女文字があり　長人
門弟と門弟うつゝかつゝ投げ　のぼる
負しから門弟になる武者修業　同
門弟は肩に強みを見せてゐる　聞路
門弟の三人四人あしらはれ　同
苦節十年門弟極意まだ取れず　秀哉
先生の謠門弟ちと覺ゑ　同
駈落ちをした門弟は惜しがられ　刀三
すておけすておけに門弟はがゆが　同
師匠一人門弟一人仲がよし　柳水
捨ておけぬ事を門弟聞いてくる　同
門弟は袴をはいてよく動き　かほる
門弟は理想に近い妻を持ち　同

門弟の一人一人の違ふ腕わたる　同
武者窓を先づ門弟が見こがめる　同
女關を出て門弟は風を切り　双柳
妻も子も有る門弟は痩せてる　同
仇討に敵の門弟多いこと　一路
新參の門弟何かおごられ　同
取次の門弟の聲大き過ぎ　秀哉
先生のあとから門弟肩を張り　同
今度だけ破門を許す惜しい腕　乾坤
兄弟子に濟まないやうな戀をする　同
高弟が負けて餘儀ない番が來る　同
門弟は知らず〳〵に年を取り　柳人
門弟の備へを門弟弱く見る　同
門弟のもう一太刀が打込めず　同
門弟に今日初めての表附　松郎
先に出た門弟變な名を名乘り　同
自信ある門弟一人默つて居　同
皆傳をされて娘を貰ふなり　放馬
門弟に案内されて來た青樓　同
師匠から問ひつめられた向ふ疵　同
門弟は腕をさすつて次を待ち　青影子
門弟に後頼んでる旅仕度　同
門弟にまかして師匠酒に醉ひ　同
門弟の中に男前一人　飯山
あした逢はうなぎゝ門弟右左　同
女關へ門弟汗を拭き〳〵出　同
ついて行く門弟の背が高過ぎる　古城山
化物の出ること門弟聞いて來る　同
門弟の何思ふてか深夜起き　同
門弟は寄つて集つて投げられる　佳鳴
もんぢりを打つて門弟參つたり　同
門はあはした聲弟で告げに來る　同
痛い顔もせずに門弟起上り　馬行
門弟に嫖緻よしかときいて見る　同
口ばかりゐるゝい門弟ばかり寄り　同
門弟のコブ門に見て貰ひ　一柳
修業者へ門弟の口少し過ぎ　同
門弟のみんなやられた仁王立　同
門弟の一人に添ふて敵討路　郎
門弟の出たこと思へばもう打たれ　同
門弟のさうやす〳〵こ負けぬ顔　同

地下室へベル一ばいにひゞく也　飯山
十一時もう地下室の好い匂ひ　松雨
空瓶は地下室へ地下室へ運ばれる　双柳
自動車のビラ地下室へ一つ散り　聞路
活動で見る地下室は魔窟なり　秋葉
地下室は食堂に出來納屋に出來　逸鬼
地下室の窓ごみが舞ひごみが舞ひ　わたる
水打つたまゝ地下室の小半日　一柳
地下室をのぼるコックの高い帽　廣賀
地下室からムク〳〵エレベーター　一路
地下室もあつて借手は未たつず　萬よし
地下室へだまって這入りこがめられ　長人
地下室を出ていろ〳〵の音を聞き　世間亭
地下室を出てほつこした姿なり　乾坤
カンテラで來た地下室は樽ばかり　波郎
地下室で遠慮なくさすト駄の音　松郎
地下室を出ると少々汚れてる　古城山
地下室の窓のほこりに裾が見ね　文久
地下室へ這入る姿がたゞ黑し　紋太
地下室へ此世の風がはいつて來　のぼる
地下室へ入ると丁稚ほたへてる　同

地下室　互選

地下室のやうにも見ゐる阪の家　炭車
地下室もあつて新築出來上り　同
小半年まだ地下室にかゝつて居　柳水
地下室で鼠見付けた賑やかさ　同
エレベーター地下室迄の用は無し　青影子
地下室へ今要らぬ物ほり込まれ　同
地下室のどもくを棄てに上つて來　放馬
地下室へ怖はゝ下りる母を連れ　同
地下室へ降りる足音氣にかゝり　秀哉
地下室の戸はぴつしやりと閉めておき　同
地下室で殺されてゐる騒ぎなり　助六
地下室はひいやりとして温いここ　同
高い駄賃で地下室中を鬱がせる　飛水
地下室の隅へ鼠を追ひつめる　同
地下室を見ると物置にしてあり　二柳子
地下室へ下駄取るだけに降りてくる　同
地下室へ下りると隅に誰か居る　柳人
地下室へ下駄下りてくる音をきき　同
スチームの管を地下室見てゐる　刀三
地下室へ畫寢の塲所をさがしに來　同
地下室で眞赤な顔と社長　逢ひ　青波
地下室へ來て球をつく晝休み　同
地下室を頭がつかへさうに行き　悠々
地下室に繪がはつてゐる誰もゐず　同
地下室に蚊のゐることを慣り　溪花坊
地下室は箱に青木を植ゑてゐる　同
地下室で自分の影が折れ曲り　路郎
地下室のあるのを知つた小間使　同
地下室の噂の中の支配人しげる
ビルヂング地下室だけが起きて居る　同
自動車が來ると地下室暗くなり　同
地下室で賣れるストックばかり見る　馬行
地下室を一歩滑べると河におち　同
地下室と思へぬ程に陽が這入り　同
地下室の散髪代が高いなり　五葉
地下室でこれも序の用を足し　同
地下室へ來て贅澤なものを食ひ　同

花童子歡迎小集

四月二十五日午後一時から川柳雜誌社樓上に於て花童子氏歡迎同人小集句會を開催いたしました。なほ當日は同人以外に波郎、十字路、溪花坊の三君が偶々來合されましたので柳談に花が咲き左記二題を課し、午後六時に散會いたしました。夕刻より大阪に席をうつし、同人の懇談小宴を開きました。（二柳子記）

瓦

儲けたと見えて瓦を葺きかへる　花童子
古瓦趣味の一つに寄せて來る　二柳子
遲刻して致員室の瓦を見　松郎
向ふ河岸積んだ瓦も景になり　かほる
瓦から芽を吹く草のうゝいてる　溪花坊
零落はしたが村での瓦屋根　松雨
鬼瓦いまだ敵手の顔を見ず　古城山
瓦皆よれば靜かな波に似る　波郎
瓦から瓦へ水の流れけり　十字路
おいてあるまゝの瓦に草が生ゐ　馬行
來て見ると瓦の見ゐる部屋で　刀三
嘘でもみな瓦の下に寢て了ふ　光太樓
瓦の割れたやうな心が續くなり　路郎

靴下

靴下を穿かす片足ぢつとせず　溪花坊
靴下にまた獨身と云ふかざが　古城山

靴下にステッキに世は春めきて　十字路
靴下を替へて元氣よく出たり　光太樓
靴下を履いてはつきり立上り　波郎
靴下を揃へた横にみかんあり　同
靴下に粗品とあるは女文字　霞乃
あみあげの中の靴下悲慘なり　同
靴下に皺が寄るのも日本人かほる
妻と云ふ誇り靴下洗ひつゝ　同
貧しさは下からも冷えて來る　刀三
靴下に少し離れて枕する　同
許嫁の鼻先へ白い靴下　馬行
ゆるい靴ゆるい靴下父は老ひ　同
靴下に我が庭ならで若葉なり　松郎
靴下を脱ぎ乍らきくきりぎりす　同
靴下み隣りの部屋へほつて寢る　花童子
靴下を違へて勤め先へ來る　同
靴下の穴今日の大きさ　路郎
靴下を投げ出し誰も來なんだか　同

第十支部小集

五月三日

虎

虎の眼に突差すやうな笹が伸び　屏三呂
豹仲間虎を上流的に見る　松郎
ちと急いて虎筍にけつまづき　同
凩を虎悄然と戻つて來　刀三
さうぢや〳〵と虎は走り出し　同
虎と獅子柵を隔てゝ年を取り　馬行
ゆれてゐる首のまんまで虎は寳れ　同

前借

心中に前借のことを云ひ添へる　二柳子
前借の序でを旦那きかされる　露斗
前借の流れ〳〵と支那へ來る　屏三呂
前借を賴みに粋な裝りで來る　馬行
前借の四五人連れで借り易し　同
前借の金の溫もり床屋出る　松郎
また来に困るぜと前借は云はれ　同
前借へ足場の事を言ひ添へる　刀三
前借の緊張をした顏で來る　同

私生兒

私生兒の遊んで呉れる子を探し　露斗
仕送りのぬし知らぬまゝ母と住む　馬行
高塀をめぐらし逢ふてくれぬ父　同
私生兒へ隣りのお子の晴衣裝　屏三呂
私生兒の虫氣もなくてよく育ち　同
私生兒も交ぜつて泥をつく居る　刀三
僕とおなじ運命だと私生兒思ひ　同
私生兒と言つては母を悲しませ　同
私生兒のちとふに落ち額が　松郎
母に揺ついて私生兒涙ぐみ　同
泣いて諭した私生兒の出來心　同

青灯居對座吟

舍弟の舟人君と共に古くから舊つて居られた小川芳翠君と、四月十七日ある訪問先で偶然に會つてそのまゝ同君の宅へお邪魔する。久し振りの事とて互ひに柳談や、柳界の話などそれからそれへと盡きず、惜かしい對座吟等に灯がともり、早や更けて行く。以前の如く復活される事を祈つて惜しい秋を別つた。

座蒲團

座蒲團を幾つも越ねて座らされ　芳翠
座蒲團が又落かゝる小料理屋　同
書生部屋に敷いてゐた座蒲團　松郎
御通過を知らず座蒲團屋根へ干し　同

炮烙

炮烙の胡麻膝へ飛び膝へ飛び　松郎
お歸りの聲と炮烙一つはぜ　芳翠

ハツタリ屋

この容に見切をつけるハツタリ屋　芳翠
ニツケルの鎖が目立つハツタリ屋　同
ハツタリ屋筋やく〳〵こかた向ける　松郎
モウリンの後見送つてハツタリ屋　同
ハツタリ屋張れへんのならこ除いて　同

眞劍に生きる

安川久流美

近頃、川柳が蘿張り作れない。いくら藻掻いても、作れない。偶に犀川の下流へでも散歩に行く。そして一寸面白い句材のヒントを摑む、だが十七字に纏めて見ると、案外つまらないものが出來る。最近、浮んだ想で

▲眞劍は根穀の垣も恐くない

それは、矢張り犀川の川べりで、キコクの垣の家を見た時であつた。そのキコクの高さも四尺位はある。跨いだ。手足に赤い血を見ることは、あきらかだ。然し血が出ても、キヅがついても、此垣を飛び越へねばならぬ。眞劍に迫つてゐる時は……何のその……だらう。人間の生きるといふことは、ある意味に於て『逃れる』といひたい。正に生きることは眞劍である。しき居を跨いだ所にキコクの針が、澤山こちらを向いてゐる——がそのキコクの針が怖いやうでは生きてゐる價値がない、血が出たり、キヅのつく心配があつたら、ハリの垣を飛び越ゑる程の、義經式になればよい。

……私のこの頃は生きるといふことの眞劍である。しかし、金を儲けて、孔雀のやうに着飾つて歩きたいといふ、秘俺を知らないために、時折太陽を見て涙を流すといふセンチメンタルな日もある

オレの子に
オレが腹立つ
子の個性

オレもいつの間にやら三十五といふ年になつた、今のところ一人の娘は五つである。オレに向つて、氣に入らぬことがあると、オレの子ではないやうな、恐ろしい眼をして、オレに刃向ふて來る。そしていくら叱つても、叩いても、やさしい女の子にはならない。——キゲンのいい時は『父ちゃん！』といかにも、あまへた如く、近づいて來ることもあるが、それは『お菓子』のほしい時だ。子供でも油斷はならない。

記者生活をしてゐるとすべて周圍の人が、ある色眼鏡をかけて交際してくれる。それが、内心たまらなく可笑しい。記者といふものゝホントウを知らない人が多い。商人よりも官吏よりも、精神的に體軀的に勞働してゐるみじめな稼業である。そして時折は國定の親分のやうな氣前にもならねばならぬ。

川柳を作れない……といふ愚痴が、頓だ脫線になつたやうであるが、作句の傍ら私は川柳らしい眞劍の生活を味ひつゞけたいものである。

川柳家の戸籍調べ

◆ 係馬行生

（一）姓名（二）雅號（三）別號（四）現住所（五）生年月日（六）職業（七）好きな句（八）好きなタイプの女（九）自信の句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配遇者の有無（一二）嫌ひなもの（一三）川柳に手を染めた年月

（8）安川久流美

（一）安川實（二）久流美（三）箕載と蛙村（四）金澤市犀川下川除町一三（五）明治二十五年一月一日生（六）新聞編輯部（七）古川柳で（八）「片捧をかつぐゆうべの河豚仲間」（八）島田髷を結ふて桃色の手拭をつけた映畫女優の柳さく子をもう少し若くした女（九）ひもじさを堪へて我子見つめたり（一〇）廢物利用（一一）あります（一二）デモ政治家とデモ辯護士（一三）明治四十二年で月は記憶してゐない、尤もその時は今の狂句で「海千が這入つて家内風波立ち」なんか作句の一。

（9）本田溪花坊

（一）本田敬之助（二）溪花坊（三）櫻國、この號は都山流尺八の師匠喜多櫻山氏からうけた名だが川柳にも文章にも用ひる（四）大阪市北區老松町三丁目五十四番地

漫畫

旅の空

吉岡鳥平

（一）宣傳　海岸の街にアラリと遊びに行た時、途で正直で人の好さうな婆さんに逢たから、この町で一番よい旅館はどこですと訊いたら婆さん頗る詳しく教へてくれた。その親切を忝く感謝し一日遊び暮した暮旬、夕方婆さんに教へられた通り行つて見たらどうもあんまり一流らしくもない家だ然し田舍だ外見を飾らないのかも知れない、まゝよと飛込だら女中に案内される廊下で「先刻は失禮しました」と云う聲がする。パテと振返つたら先刻の婆さんがニヤ〳〵笑ひ乍ら立て居たのに全く開た口が未だにふさがらない。

(二)天然浴槽　夏の一日を歩き疲れて高山の麓へ行たK君旅館へ着と下女が出て「お風呂はいかがです」と云ふ。全身の汗まみれ、イヤ待てましたと「すぐ行」と手拭と石鹸箱を持て行と下婢は下駄を履てドン〳〵行く。戸外に風呂があるのだらうとK君も下駄を履て跡からついて行く。一町二町三町、風呂らしい建物も見ないが先に立つた下婢は平氣で寂しい森の方へ行く。仕方がないから狐につまゝれたやうな氣でK君あとからついて行と六町はかりで小川のほとりに出たしたら「さあどうぞ御ゆつくり」と云つたまんま下婢は今來た路をスタスタと歸つて行て仕舞う。其の旅館の風呂は冷い此天然浴槽だつたのだK君呆然。

(五)明治廿三年十月四日生(六)以前は實屋、現在は川柳大大阪誌を出して遊んでゐる(七)時の環境でいろ〳〵に思想が變るので例が上げられぬ(八)桃割に振袖、所謂下町風の女を好む。一人娘もさうしたタイプに育したいと思ふ(九)お恥しいですが、あゐません(一〇)ありすぎて困る(一一)有(一二)なし(一三)明治四十一年の秋、ハガキ女學而笑子選に出したのが初め。

(10)小田愚劣

(一)小田廣須賀、横須賀と間違ひさうな名だ(二)愚劣(三)二三ある也暫く使はせず(四)宝蘭市輪西町三條(五)明治二十二年四月十一日生、氣の若いこと十八九〳〵(六)商人(七)諸兄の句には好きなのが澤山ある「すき燒の湯氣しん〳〵と灯に屆き」なども好きな句です(八)慾に限りはないが眼のパッチリとして黑眼勝なごこゝなく愛嬌のある女、燒コテなどを當てたオールバックの大股に反つて歩くよりは、純日本風の小刻みに歩く淑やかな女が好きで多年こうした方面に眼を付けてゐたが不幸にして天はその望みを與へて呉れなかつた(九)今の所なし(一〇)現住浸つてゐるのは恭だけです(一一)有(一二)山椒の匂ひと傲慢な面(一三)大正十一年三月頃、まだ産みたてのホヤ〳〵

(三) 朝の日課

B氏は專問學校の教授だが、病氣の方も亦專問學校の教授だけの實力が有ると見ゐて、三十八の今日、まだ寢小便と云う厄介至極な凶狀持ちだ。だからB氏の鬼門は旅行だが、退つ引ならず出掛けて旅館に泊つた時は次の朝女中を呼んで水を持つて來てくれと命じる。女中が持つて來ると丁度布團の現場附近、でワザとコップを取りそこなたやうな振りをして、水をザアッとこぼして「ヤッしまつた、失敬失敬」と美事に寢小便の跡をゴマ化す。是がB氏の旅館に於ける最も困難な朝の日課ださうな。

(11) 塚崎　松郎

(一)塚崎七郎(二)松郎(三)便用の都度作號し同一號を再用せず依て一定したるもの無し(四)大阪市北區佐藤町一八(五)明治廿七年十一月六日、午の七赤浮氣星(六)會計士(七)古句では「古池や蛙飛込み浮いてゐる」現代句では「兒の寢顏短氣な事は思ふまい、玩月」最近句では「灯の搖るゝが風の姿なり、日車」(八)上品な女人風の女　笑醫が無くて愛嬌のある、はつきりして丸みを帶びた聲の持主、男の短所を輕く叱る女、風彩言語共に巧みにあやつる女、總て氣轉の利く女、黑田健次に於けるお島の如き女(九)あやまでものゝ言おやゝの口答へ(一〇)落語、歌澤、游廓研究(一一)無し(一二)目刺、筍貝類、現代式の女、誤解される事、活動寫眞(一三)大正四年十二月。

(12) 松本　波郎

(一)松本春雄(二)波郎(三)宗田社郎、(四)大阪市浪速區元町一ノ七六九(五)明治三十九年六月一日生(六)職業今は無し(七)古人の句が一番好き、現在の人にも大分ありますが、兎に角輕妙なのを今好きます、これからぢう變つて行くか解りませんが(八)美人でなくてもよい愛想のよい肥ゐた女中肉中背は餘り好過ぎて、痩せたのはこわい。僕はまだ女の事を云

（四）待　地方講演に招待されたS氏、その村の歓待實に到れり盡せり。悉くいゝ心持になつたS氏、サテ寢室に行つて見と布團の上には坊主枕と箱枕と二つの枕が並べてある。イヤ是は無上の待遇と喜で女中の顏や宴會の藝妓の顏をあれが來るかこれが來るかと考へながら咽を鳴らして待つて居ると やがて唐紙が開いて優しい衣摺の音だ。ウフウフと悦に入つて狸寢入をして居ると忍び寄つた女は箱枕を取上げると急いで出て行つたきり、朝まで何の事もない今か今かと到々一睡もしかつたS氏、翌朝赤い目を擦ながら夫れとなく有志の男に聞と「賓客には坊主枕と箱枕を出てお好に任るのが此村の習慣です」S氏ギヤフン。

いふのは早い？（九）「學校へ未練氣もなく初舞臺」が最近の自信の句です（一〇）芝居及芝居をすること、落語、活動寫眞繪、その他川柳家の好くやうな事は大方好き（一一）おまへん（一二）支那料理他多數あつて困ります（一三）大正十一年十二月。

（13）喜多柳人

（一）喜多庄太郎（二）柳人（三）笑聲（四）大阪市東區安土町三丁目一七西野方（五）明治三十四年二月十五日生（六）桶職（七）癇癪が遂に飼犬下駄で蹴り、秀哉（八）愛嬌ありあつさりした女清潔好きな女（九）ナシ（一〇）將棋但下手の横好き（一一）有（一二）茄子の葛煮、卷煙草吸ふ女（一三）大正十二年十二月。

（14）竹内多聞

（一）竹内峰治（二）多聞（三）蛸天、背拜（以上、柳）洒川、友石、方耳、翠村（以上俳）旦瀞（宗）蓑泣庵主人、徹底居士（四）大阪市住吉區濱口町三三六（五）明治三十一年九月十日生（六）會社員（七）すつぽんに拜まれた夜のあたゝかさ（八）雨に萎める秋海棠のタイプ否——風情の女（九）ナシ（一〇）俳句、淨瑠璃、落語、漫畫（一一）この度求めた（迚も貰ふては戴けぬものゝ）諦めてゐたのに）と云ふ娘を（一二）煙草、煮茄子、毛蟲、嘘（一三）大正九年初夏。

柳壇無駄話

遲日莊主人

一　無　口

函館から遙々來阪された花章子の夫人と葭乃さが遲日莊の二階で會つた。女と女、春の日永、それは必然的に雲雀のやうに、小鳥のやうにプロペラが回轉したもの。想像を逞くしてはいけない。二人は至つて無口なのだ。お互に初對面のお辭儀をした。そして長い間沈默。思ひ出したやうに視線を合致させてニツコリ、そして沈默。

ここのとも云はせない。話聲も聞こねぬ。ハハア、さては便所へでも立つたのかと思つて覗いて見れば、二人とも膝に手を置き端然と正座してゐた。それで居睡つてもゐないのだ。聞いて見れば別段淋しくもないんださうな。

二　親　類

ごこの句會でも、さつと顏出しをするのが松郎である。

ある物好きが、句會出席數の統計を作つたところが松郎が關西隨一だつたさうだ。

その松郎が、ちよい〳〵句會や編輯に顏を見せない時がある。さては戀人でも出來たのではあるまいかと變に氣を廻してゐると句會半に、眞赤な顏で汗をふき〳〵やつて來る。

『親戚に不幸があつてな。一寸抜けて來たが、昨夜は徹夜だつた。』

これが彼のおしきせの言葉である。本號の編輯も矢張り親戚の不幸でお通夜の翌日だつたので、編輯の片附いたころに、息せきやつて來た。松郎には親戚がごねだけあるのか、ちよつと見當がつかない。

三　孝　行

馬行の句には母を詠んだ句が多い。そして其の殆んど總てが佳句である。父を失つた彼は一人の母に孝養を怠らない。夫が句の上に表れて來るのだ。夫につけて思ひ出すのは石川啄木のたはむれに母を背負ひてそのあまりの輕さに泣きて三歩あゆまずの歌である。

啄木の孝行歌に對して馬行の孝行川柳を一二枚いて見やう。

五年先輩の請け合ふ母の前
長生きを母にすゝめて箸をこり

募集句

爪

齋藤松窓選

爪の恰好までが父に似てゐなり　一路
爪をかむ癖の娘に母案じ　左馬
橡で剪る爪は八角金盤の葉　蔦歩
小指だけ爪を伸して代書業　普天
二階借窓から剪つた爪を棄て　喜花
爪先で一枚めくるタイピスト　山月
うつむいたまゝで娘は爪をかみ　眠聲
口説かれて居るのが爪の垢を取り　雅幽
右の手の爪を切つてる面白さ　俊翠
爪の垢また神經が起るなり　黎明
敷いて居る新聞を飛ぶ足の爪　山美
女房は一寸も伸びぬ爪を見せ　琴月
まだ爪をかむ癖がある若旦那　正坊
爪先で歩く座敷の灰神案　乾坤
何うしたんやと聞かれて爪の色　佳鳴
長火鉢じれつたい夜の爪をかみ　時雨郎
爪皮の取れたも知らぬ程急ぎ　柳人
鼻紙に包んで爪を棄てさせる　しげる
忘れないやうにと爪の形を入れ　彩石
爪を摘む心になつて膝を立て　紅短册
指角力嬉い爪の方が勝ち　柳暉
縫ふてゐる爪を日ざしの弱いこと　同
病上り明日は爪を切るつもり　駒人
生爪をはがして早い宿につき　同
爪立てた燈明の灯が少し搖れ　吐露樓
あゝやつて居うやつて爪の土を　同
爪を見るのは羞かんだ姿にて　同
爪切つた日の内職がはかどらず　凡平
返盃の子分の爪の長く伸び　同
爪切れと雜魚寢の一人ほり出され　同
獨酌の爪は淋しく伸びて居る　同

（舊作）

爪をかむことも淋しき夕となり　松窓

文壇と柳壇

塚崎松郎

詩人あるべき、文學であるべき、藝術であるべき川柳が、未だ文壇にあらはれお識者に認められないのは如何です、と先つ甲が發言した。

從來の川柳では認められぬのが當り前のことで、だから革新川柳を叫むでゐるのだ。つまらぬ容觀句のみの古川柳模倣では駄目なのであるから、人生を藝術的に表現する新しい句によつて川柳の向上を進めもつて大いに文壇に接觸して行かねばならぬ。と次に乙が發言した。

お前達はだから若いといふのだ。川柳は日本米を食つてゐる人間が吐くところの個々の思言である。川柳は別に革新を叫ぶ必要もなければ文壇に認めて貰ふといふやうな情ない頭を持つてはいけない革新川柳なれば文壇が認めて既成川柳は認めないと思つてゐるのか（廣く靑かに考

鹽

瀧の音させて鹽の用が濟み　彩石
水はつた鹽は二人して運び　柳暉
糊つけになつて樽屋の樣な音　しげる
半日は鹽に用のある日和　一閑子
初產の鹽座敷へ上げて待ち　柳人
臺所を尻と鹽が狹ふする　山美
物干の上からお邪魔してるます　正坊

五　客

朝風呂

◎馬行選

朝風呂へたまに這入つて風邪をひき　呑氣坊
朝風呂に五本の指は見ゑて居り　松雨
旅の町朝湯歸りに一廻り　竹榮
朝風呂に丁稚起して行く旦那　曳峰仙
番臺の朝を氣樂老夫婦　千賀女
朝風呂へ床のぬくもり持つて來る　默太
朝風呂も入れない田舍住居にて　支柳
朝風呂にいつもの人が來ず淋し　普天

竹田芦穗選

鹽と鹽お妾の噂なり　駒人
倒けた子と鹽と井戸へ來る騷ぎ　山月
鹽もう暫くと言ふ子をすかし　凡平
鹽から兄ばつかりが叱られる　松郎
久し振り鹽の水が漏る話　竹榮
(人)女房がまだ若かつた日の鹽　吐露樓
(地)暫くの生命鹽の鯉が跳ね　突支坊
(天)玄關へ鹽の水の薄明り　柳暉

林田馬行
太田一聲　共選

碁のそばへ朝湯の湯氣を立て來る　鳶歩
朝風呂の歸り煙草を買ふて來る　一如軒
朝風呂で夜の汚ないのを話し　秀甫
朝の風呂少し氣樂な手を叩き　突支坊
朝風呂に髭剃る客の多い事　柳暉
職業婦こかで毎朝風呂へ來る　皷竹庵
朝風呂で三越行の連れが出來　案山子
湯にぼけた窓へ朝陽が射して來る　山美
石みがく音も朝風呂氣持よし　一路

へてみたまへ既成川柳は客觀句が多く革新川柳は主觀句が多いのである。川柳は共に必要であつて、既成だとか革新だとかいふ呼び方はいけない。只客觀、主觀句と(大別して)言つた方がよいのだ)

從來の川柳だつて文壇の奴等一人も解する者がないではないか中央文壇に云々されねば藝術の價値のないものと君等は思つてゐるのかね。一度圖書館へ行つて日本文學の叢書類を漁讀つてみたまへ。文學博士や學士の多くの奴等が原稿料を稼ぐ點にのみに走つた出版書にどんな事が書いてあるか、川柳と狂句の區別さへ知らず、甚だしいのは川柳は遊戯だと解してゐるたわけ者ばかりだ。それは川柳の名句を揚ぐれば次のやうな句であると甚だ數い狂句を大部分柳樽中より描出し掲げては『皮肉諷刺これ川柳なるかな』などゝ亂棒な行數を埋めてゐるではないか。また最近拙い川柳を選した一文人の例もあるではないかと丙が發言した。そ

朝風呂へ入って着物は着替へられ　木屑
朝風呂と社へ行く人と立話　駒人
過去現在未來も思ふ朝の風呂　みのる
けんたいに桶二つ取る朝の風呂　隨帖
今日損をするとは知らず朝の湯へ　眠聲
世辭を云ひ乍ら朝湯の背へ廻り　盜泉
三助の替りまでする早い風呂　山月
朝風呂で家主に逢ふたいゝ天氣　双柳
朝風呂で旦那の癖は齒を磨き　喜花
澄み切つた空が映って風呂の朝　一閑子
朝風呂に何か思案の顏も居る　佳鳴
襤袍着て來る朝風呂の女下駄　乾坤
寢不足が欠伸で這入る朝の風呂　同
朝の風呂一筋づゝの湯氣が立ち　吐露樓
朝風呂の腹に泌み込む午砲が鳴り　同
朝風呂へ割間旦那らしく來る　萬よし
松ヶ鼻朝湯に二人もてた聲　同
朝湯から歸つて旦那飯にする　柳人
降つてゐる事に朝風呂氣が付ず　同
桶二三つ重ねて朝の風呂　しげる
朝風呂へきやしゃな手籠を提げて行き　同
朝風呂へ近頃儲けたらしい顏　凡平
朝風呂の顏が花見を誘ひに來　同
朝風呂で隱居が寄附を賴まれる　同
石鹼の滑り心地も朝の風呂　松郎
妻に何か輕く命じて朝の風呂　同
朝風呂で首を右にし左にし　同
朝の風呂按摩のあとがまだ痛い　同
さぞ客や待たん朝の風呂を出る　同

五　客

朝風呂で流さにやならぬ人に會ひ　喜花
朝湯から歸つて行李混ぜ返し　山月
朝風呂で夜業の背を流し合ひ　一閑子
朝湯出て國旗を蹴る風を見る　愚劣
朝風呂の流し場汐が干いたやう　盜泉
(人)朝風呂で今日は是々こと　眠聲
(人)朝の風呂かくて會社へ　松郎
(人)朝風呂に一人の波が打ち　吐露樓
(地)朝風呂へ來てうつかりと今晩は　佳鳴
(地)朝風呂は沸いて來るのがよく解り　隨帖
(天)朝風呂でその健康へ水を浴び　乾坤
(軸)朝風呂の隅へ心配持って來る　馬行

して更に
だから川柳は文壇から認めて貰ふなんて弱い言を吐かずに、せつせこいゝ句を作つて行けばいゝ。時代が來れば彼等の方から進んで川柳を研究に來る時がある君達はちと俳句界を觀たまへ僕の言ふ事が一番よく解るのだ。今俳句は文壇に於て大分云々されて來たではいか　その研究されてゐるところの俳句を見給へ碧梧桐や井泉水の俳句よりも、既成俳句を述べてゐるではないか。解つたかね最後に一言しておくが、彼等に文壇あれば、我に柳壇あり矣だ。柳壇は文壇を解すれど文壇は柳壇を解せずだ。ヒロを結んだ終電が來たので三人は別れた。

それがし

作句する路郎に眼鏡ずつてくる
紋太君息もつがずに二へん讀み
溪花坊とつぼゞ飲んだ顏で來る
背に尻向け一柳子の幹事振
眼を閉じた五葉頂戴繪くなり
古城山すてつぺんから讀み損ね
礎の坊おぼん少々てれて來る

◇　一聲選

朝風呂へちと氣の毒な裝で來る　柳人
石みがく音も朝風呂氣持よし　一路
朝風呂へ今日鍛入りの下女も行き　木屑
朝風呂に割烹且那らしく來る　萬よし
朝風呂で朝刊全部見て歸り　駒人
過去現在未來も思ふ朝の風呂　みのる
手拭と湯札に蒲團まくられる　皷竹庵
朝風呂へゆうべの醉のまだ殘り　松雨
朝風呂へ一杯機嫌の勞働者　呑氣坊
樂しみは朝風呂だけの年は老ひ　竹榮
朝風呂に丁稚起して行く旦那　叟峰仙
献立てが朝風呂を待つ日曜日　愚劣
朝風呂と夜業の背を流し合ひ　一閑子
朝風呂の顏が花見を誘ひに來　凡平
朝風呂の泳いで見たい廣さなり　佳鳴
初節句母は朝から風呂をたき　支柳
楊子くゝお早よう〳〵と朝の風呂　濁水
朝風呂を歸つて行李解ぜ返し　山月
丁寧に話し合つてる朝の風呂　しげる
朝風呂の石は半分乾いて居　一如軒
朝風呂の序市場へ廻つて來　双柳
朝風呂で家主に逢ふたいゝ天氣　同
江戸ッ子の誇り朝湯で蛸になり　盜泉
御隱居と云ふが朝湯の一の客　同
朝風呂で考へついた今日の智惠　吐露樓
朝風呂で手を伸したり縮めたり　同
朝風呂で流さにやなぬ人に會ひ　喜花
公休日朝湯で髮を分けてくる　同
敵娼かどうのかうのと朝の風呂　眠聲
京へ行く體を朝の湯にひたり　同
朝風呂と書いて宿屋が客を引き　案山子
入る音が一人らしい朝の風呂　同
朝の風呂湯氣の中から觀世流　山美
恥しい程朝風呂に透いて見ゐ　同
朝風呂へ泣かぬ子供を連れて來る　隨帖
番臺の時々居らぬ朝の風呂　同
朝風呂の歸り溝板跳ねあがり　松郎
石鹼の辷り心地も朝の風呂　同
朝風呂の湯氣が頭を輕くする　同
(佳)朝風呂へ日本晴の陽が當り　松雨
(佳)朝風呂に手桶の音は甲走り　默太
(佳)寢不足が欠伸で這入る朝の風呂　乾坤
(佳)朝風呂に少し世帶が樂になり　秀甫
(佳)朝風呂の女將へ急ぎ用が出來　駒人

震災に際して

川柳雜誌社　厩生路郎

◇城崎、豐岡方面(五月廿三日午前十一時十二分)の大激震に際し川柳家諸氏の身邊を案じて居ります。本社でも同人の西垣松雨氏は豐岡町に十數軒の御親戚があり、同氏の鄕里は豐岡町から僅に二里餘の出石ださうですから御心配のほどお察してゐます

暑中見舞の廣告を募る

▼奮て申込まれたし▲

▼一口金五拾錢(一頁の十二分の一)

幾口でも申込んで下さい。一百に限り金五圓・一口分の原稿は、なるべく簡單にお願ひいたします。廣告料金は前金のこと。

▼申込期限七月十日迄(八月號掲載)

川柳雜誌社

振替大阪三一五一四

◇本社も同じ兵庫縣ですからかなり强震で茶瓶がかたむいて灰神樂をあげ、家族は後庭に萬一の難を避けましたが、何等損害なくして終りましたので御安心を願ひます。各地柳友諸兄から續々と御見舞狀に接しましたので謹んで御禮を申述べます。

古句研究上の滑稽

西原柳雨

頭腦がどうかして居る時には何でもない平句がどうしても解らなかつたり又は飛んでもない間違を釀したりすることがある。現に諸々號の略語解中に

駒形は百兩ごくは五十也

の兩を百兩と續けごくを兩國の略とするなど馬鹿々々しくてお話にならぬやうな誤解を述べて實に恐縮した國をごくと書いてあつた爲に迷ふたことは云へ明かに兩ごくとあるものを兩と國と別に切つて讀むなど頗る御念入りの間違をすることは自分ながら餘ッ程呆餘したもの哉と悲觀せぬ譯にまゐらぬが毛にも角にもお叱りを蒙らぬうち右の一句は略語解中から墨黑々と抹殺することに致します。夫に就て昨年まだ葉山に居た時分の舊聞ではあるが一寸可笑しきお咄しを致し升が三面子先生と晩酌の際に例の下物として持出されたのが年代不詳の古柳書であつた。最初にて出來たのが

すりこぎ坊主すりばちを打ながめ

と云ふ狂句であつたが何事を云へるものかさつぱり解らぬ。眞てなと小首を捻る傍から三面先生得意の北叟笑を洩らしながら其句が解らぬとあつては須く川柳屋の看板を取おろすべしだねとの御託宣殘念ことは思へど兜を脱いで教を乞へば先生咳一咳『摺鉢を伏せて眺むりや三國一の味噌を駿河の不二の山』と云ふ小唄は御承知かな、何知つてゐると、よし〳〵そこで摺小木坊主とはお粗末な墨染の法衣を着た……アヽ先生解りました、もう以上の御說明に及ばせぬと云ふをも聞かずマアさ待ち給へそして風呂敷を斜に脊負つて後向きの富士見西行さ、サア罰杯を來た、悔しいけれど波々と一杯飲んで二三句を讀み過ぎて行くうちに

黑いすりこぎ白い摺鉢をほめ

と云ふ何でもない句に出會つた。こんどは三面先生の天窓が少々怪しく成つたと見ゐて頻と考へて居られるッ先生夫が解らぬとあつては須く川柳屋の看板を取卸すべしだね、解らねば教へて上げませう、エヘン〳〵『摺鉢を伏せて眺むりや三國一のみそをするがの不二の山』と云ふ小唄は御承知かな、よし〳〵そこで黑い摺小木とは御粗末な墨染の法衣を着た……アハハ…解つたッ〳〵、ちッ以上の說明には及ばぬ、夫では降參すすねサア罰杯とドット笑つた、その場を去らず鸚鵡返しの敵討は近頃の快事であつた。

▼この原稿は前號に掲載する筈であつたが編輯の都合上本號に載せることになりました。それがだめ筆者に御迷惑をかけたことをおわびいたします。

川柳塔

○　井上刀三

わびしさは唯まごかなる妻と居る
黑襟の女もある時はよろしき
紅茶なぞ呑んで書齋に居りたし
鑑母の意志が手紙に盛られてる
酒に呑まれるなぞ嘘と思へり
あはれさは崩れる樣な美しさ
期待して居てくれたのかと笑ひ
大臣になるなぞともう考へず
何も希はじ唯生きて居たいかな

○　西垣松雨

悲しみの眼に燈明のうるんだ灯
當選をして丸帶をねだられる
婦人科醫になつて豫想は裏切られ
生れつきなぞと其塲を濁すなり
長い髮氣にして怖い夢を見る

編輯後記

△前號から毎月一日發行に變更し、川柳漫畫なぞを入れて大いに發展振りを示したので、各地の川柳家から大變な讃辭を呈せられ同人一同更に氣勢をあげるため努力に次ぐ努力をつづけてゐます。

△本號には前々號に發表された武笠山椒氏の本事川柳の續稿を掲載することが出來ましたのを讀者と共によろこびます。

△本號には漫畫家吉岡鳥平氏の旅の空をのせることが出來ました。これも本誌の一特色であります。今後川柳家の句を漫畫にして發表したいと思つて居ります。

△新進氣鋭の庄萬よし氏が今回本社の同人になられました

△從來『近作柳樽』は句數無制限でありましたが、句數があまり多數で選句に非常な時間を要しますので今回五十句以内に制限を附することになりました。

△來る十四日午後四時より函館市末廣町東部事務所樓上に於て函館川柳社創立十

○　關本雅幽

使わるべからずと日頃教はりし
ランプの灯背戸の籔まで屆かして
黎明をこんちんかんに寢る夜業
蝸牛嚙りついてるくされ株

○　林田馬行

一人一人になれば善き人ばかりなる
有難や喜ぶ母の顏の皺
宙に浮くやうな思ひのセル時分
自分だけのものにして置くやうになり
戀人の聲を頭の上で聞き
返事せぬ顏を覗くと横を向き
お嫁に來てあげますと明るい聲
事實上自殺してゐる人の群れ
いゝ事よなぎと戀人速い足
鐘の音の行方究めるやうに立ち

○　黑木莢豆

戸を立てゝ安んじて寢るばかりなり
復讐を決して脚氣治ほしてゐる
横にしてみてもやつぱりこのからだ
こんな氣に死ぬ日が知れて來ればよい
雲雀かて淋しからうさツバメかて
人の子の泣きなさんなよ陽が出ます

周年、忍路七周年、例會百回記念川柳大會を開催されます。

△山口縣山口町の山口川柳から「牛」が發行されました。發展を祈ります。

△松江の澁柿會から發行されてゐました「頬杖」が今度休刊になりました。かなり古くから出てゐただけに淋しく思ひます。更に捲土重來の日を待ちます。

△同人宮内一洲氏は左記へ轉居されました。神戸市上中島町一丁目四二番地。

六月例會

日時　六月二十日午後六時
場所　大阪市南區濱水町停留所西入

端の坊

兼題「婿」二句　路郎選

會費　金貳拾錢

句會に出席したことのない人でも御遠慮なくいらつしてください（幹事）

△本誌選者伊東夜刄郎氏の母堂が五月二日午後零時に逝去されました。お悼み申しあげます。

△舊同人竹田蘆穗氏の母堂が五月十三日に亡くなられました。お悼み申します。

人の子の屁が臭いとは正直な
人の子の惚れなさんなよ血が出ます　高橋かほる

○

拍手があつちと合ふも朝詣り
握手の君の力の頼もしく
舟遊び手の切れさうな声に觸れ
煙草の火二三度貸して人を待ち
院長にしてスリッパを履きぞこね　塚崎松郎

○

下駄二足残し水嵩減つて行く
お前等に朝の氣持が分ろまい　麻生葭乃女

○

ひとたびは金持ちの手にあつた金
墓口で黒くなつてる豆寫眞
吾思ひ葉巻の煙に浮ぶやう
老いてなほ檢定試驗受ける父
上燗屋等を伸せば向ひ側
明け方の夢を氣にせず肥ねてるる　橋本二柳子

○

傷らぬ妻を時々叱るなり
魂の事でだん〳〵夜は更ける
待つてゐる間頻りに石を投げ
曲るとき僕の姿が消ゐる道だ
花の咲く道へ子供を連れて來る
旅立の草鞋一足きつく踏み

前號正誤

前號近作柳樽中、六頁上段三行目より「内職の女房にすまぬ酒に酔ひ『俺が守りした子が子供抱いて來る』『念に念押して妾は歸すなり』の三句の作者元山氏とあるは、佳鳴氏。同上十二行より『もう俺の世でない人に碁を習ひ』『末の子におもちやあんまりかよは過ぎ』『睦まじいここを向ひの娘に見られ』の三句の作者廣賀氏とあるは元山氏。同六頁の下段にて「第三者少しは違ふ事を云ひ」「就職の頼むにしても無沙汰勝ち」「割烹衣にすがつて出來損ね」の三句作者佳鳴氏とあるは、廣賀氏の誤り。

●親が寄るとき淋しい未亡人　乾坤
●僕の見るところはさうでない意見　同

『花童子歡迎句會』の十三頁中段二行目作者蘆福は蘆穂、同八、九行目作者蚊家は蚊象、同一三行目作者世間坊は世間亭同(天)の作者は、しける、の各誤り。同十行目『解ふて去に』は『醉ふて去に』の誤り。上段十一行目(天)缺とあるは類句あれしかめ抹殺。

▲道頓堀川にかゝつた日本橋を南へ渡つて半丁も行かないところにある古本屋です。
▲主人公藤堂氏は愉快なおぢさんです。とても古本屋のおぢさんとしては珍らしい人です。
▲古本を漁りながらいろんな話をしてゐれば道頓堀を歩いて來た感じが流れるやうに出て來ます。
▲こゝの特色としては、どんな本でも蒐めてあること、値段のところはまかしておいても安心して買へると云ふこと買ふとか買はぬとか云ふことを問題にせずに愉快に本を見られるといふことです。
▲せいぜい主人公とお馴染みになつて下さい。探して貰ひたい本があれば頼んでおきさへすれば出來るだけ便宜を與へて貰へます。（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は淸記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第二卷第八號課題

六月十五日締切
（各題二十句以內）

▼三味線屋　坂井久良岐選

▼鰯　柳川洲馬選

▼親類　西垣松雨　高橋かほる　共選

第二卷第九號課題

七月十五日締切
（各題二十句以內）

▼銀行　本田溪花坊選

▼泡　麻生葭乃選

▼工事　井上刀三　原史風　共選

毎號募集

▼近作柳樽（五十句以內）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）　編輯局選

▼文章（評論研究吟行漫文）

定價

一部　參拾錢（郵稅）
六部　壹圓六拾錢
十二部　參圓（共）

廣告料

本誌の廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は尋新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年五月廿五日印刷
大正十四年六月一日發行

第二卷第六號
（毎月一回一日發行）

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市東區農人町二丁目七番地
印刷所　藤本兄弟社

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
發行所　川柳雜誌社

振替大阪三一五一四番

賣捌書店

（大阪）明文堂　公立社　柳屋
（東京）東條（京都）三宅（神戸）米田
（金澤）石井（松任）三須（函館）石塚

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　井上刀三
原史風　林田馬行
橋本二柳子　二木幸堂
西垣松雨　德田双柳
太田徹底郎　太田一聲
龜井〃童子　高橋かほる
高橋古城山　高見柳骨（入營中）
竹内多聞　塚崎松郎
宗清夜調　黑木莢豆
矢田右大臣　柳川洲馬
駒井美の作　麻生葭乃
佐々木默閣　宮内一洲
庄萬よし　平井光太樓
森田輝翠　關本雅幽

第一支部　大阪市港區八條通二丁目南小路
幹事　橋本二柳子
第二支部　大阪市北區南同心町二丁目四五〇
幹事　原史風
第三支部　岸和田市下野町四一九
幹事　太田一聲
第四支部　大阪市港區鶴町四丁目十三號地嵐山方
幹事　關本雅幽
第五支部　大阪市東區餌差町二二一番地
幹事　駒井美の作
第六支部　兵庫縣武庫郡六甲苦樂園
幹事　佐々木默閣
第七支部　大阪市東淀川區南濱町一八二
幹事　西垣松雨
第八支部　神戸市上中島町一丁目四二
幹事　宮内一洲
第九支部　山口縣山口町石原小路
幹事　柳川洲馬
第十支部　大阪市外豐中榮通二丁目石賀方
幹事　林田馬行
第十一支部　東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内
幹事　岩崎柳路
第十二支部　函館市青柳町五〇
幹事　龜井花童子
第十三支部　大阪市住吉區安立町五丁目一二三
德田双柳
第十四支部　朝鮮仁川仲町二丁目八
幹事　矢田右大臣

柳樽より

駕籠にゐて拜む身受けの淺草寺
琴棋書畫ならべたばかり知りんせん
孝行に賣られ不孝に請け出され
きぬ〴〵のあとは身になる一と寢入
傾城はかたきが知れてすてられる
言ひにくうありんすねねと氣味惡さ
ぬしの手で御箸紙と書きなんし
嘘つかぬ傾城買ふて淋しがり
うらの食は四五寸近く來て坐り
湯氣の立つなりで鏡の蓋を取り
簪で突つゝき廻す三世相
その櫛は誰が施主だと嫌がらせ
泣く時の櫛は炬燵を越して落ち

大阪十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大阪十四年五月二十五日印刷　大阪十四年六月一日發行
第二卷　第六號（第十七號）
定價金參拾錢